山梨医大紀要　第2巻, 68－75(1985)

『カンタベリ物語』総序文の中でチョーサーが初めて使用したラテン語とフランス語の研究　(2)

保谷一三

これは本紀要第一巻に書いたチョーサーが『カンタベリ物語』総序文ではじめて借用したラテンとフランス語の研究の続きである。借用語数59のうち、1．～26．は既に書いた。今回は残りの全部27．～59．を扱う。前回同様チョーサーの借用年代1386年をフランスにおける初出年と比較し、借用の早さ、借用の文化的背景を論じる。またフランス語は大陸のそれと英国のそれとを区別し、借用の意味のちがいを明らかにする。

なお本研究は1984年度文部省短期在外研究員として連合王国マンチェスター大学及びフランスポー大学において7月から9月までの二ヶ月間行った研究の成果であることを報告する。

キーワード：チョーサー　ラテン語　フランス語　借用語

27.　OF gypon [gipon] *n* 1386 Ch. *Prol.* 75

Of fustian he wered a *gypon* 75

（大意）ファスチアン織の胴着を着ていた。

これはKnyghtのことである。*S. O. D.*によるとOF gip(p)on, gup(p)on, a tunic frequently worn under the hauberkである。従って次行76のAl bismotered with habergeon; は「上に着た鎖かたびらの跡がついてすっかり汚れている」の意となる。G. D' Hによるとgipe, gipon, formes de JUPE, JUPON : un bon gippon de soie (XIVe s., *Guescl.*) で、チョーサーの同時代にその語がフランス大陸でも用いられていたことがわかる。ただ*lexis*によるとJUPEはもとアラビア語で1100年ころ借用され、「胴着」を意味したが、1620年ころから女性のスカートを意味するように変り、JUPONは1319年初出で「袖のある胴着」から1680年にはペチコートを意味するように変っている。一方日本で和服の下につける襦袢（じゅばん）のもとであるポルトガル語gibãoはgiponの同類と推定される[51]。

28.　AF haberbasshere [haberbasher]　*n* 1386 Ch. *Prol.* 361

An *Haberdasshere,* and a Carpenter, 361

（大意）（一行の中に）小間物屋と大工（がいた）。

Ox. Eng. Etym. Dic. によるとhaberdasherはdealer in small articles pertaining to dress, formerly of wider application XIV. *prob.* －AN. とあり、チョーサーの14世紀に使われた語で、AN（＝AF）に由来すると推定している。StoneとRothwell編のアングロノルマン語辞典にはhabredache, －erdach s. *haberdashery* として出ている。フランスではboutonnier（ボタン商）は1268年初出で古いが、mercier（小間物屋）は1497年初出[52]で英国よりも一世紀遅くなる。

29.　OF hostelrye [hostelry] *n* 1386 Ch. *Prol.* 23

At nyght were come into that *hostelrye* 23

（大意）（一行は）夜その旅宿に入った。

*S. O. D.*によるとhostelryはOF (h)ostelrie(Mod. F hôtellerie), an inn, hostelとなっている。StoneとRothwell編の辞典によるとAFではhosterie, hostrieでlを落しているが、大陸のフランス語と同系とみられる。

30.　ML licentiat [licenciate] *n* 1386 Ch. *Prol.*

山梨医科大学英語

（受　付：昭和60年9月6日）

220

For of his ordre he was *liceniat.* 220

（大意）なぜなら彼は教団から許可されていたからである。

これはFriarのことである。教区牧師ではないが、人々から懺悔を聴くことができた。Dauzatによるとフランス語licenciēの初出は1327年で、d'aprēs de latin *licenciatus*としている。*lexis*では初出1349年であるが、いずれにしてもチョーサーの同時代に使われはじめている。そしてチョーサーのこの語がMLであることについてはDenifle編 *Chart. Univ. Paris* I No. 231 p. 259 (a. 1254) にDiem ad incipiendum licentiato assignet (=so as to set the date for the licenciate to begin) があり[53]、百年も前に既にパリ大学の権威がlicentiateの問題を扱っていたことになる。

31.　OF luce [luce] *n* 1386 Ch. *Prol.* 350

And …many a *luce* in stuwe. 350

（大意）そして…沢山の河鱒を池に飼っいる。

これはFrankeleynのことである。*S. O. D.*によるとluceのもとはOF lus, luisで、late L. lucusに溯る。このような魚を沢山飼うことについては9. breem（食用鯉）の項で「食糧危機に備えて」としたが、Pollardによると「数多い肉食禁止の日に備えて」となっている[54]。なおbreemの古フランク語→OF→MEの流れは中央アジア原産のこの魚の西進の経路を示していることがわかった[55]。また現代仏語ではluceではなくbrochetを使う[56]。

32.　lynen [line] *v* 1386 Ch. *Prol.* 440

Lyned with taffata and with sendal ; 440

（大意）（服の）裏地はタフタやセンダルだった。

これはDoctour of phisicのことである。lynenのもとのフランス語動詞はlinierで、Dauzatによると1268年初出である。この動詞のもととなっているのは名詞でlin（亜麻）である。linはラテン語linumに由来するが、1155年初出で、*lexis*によるとこの植物はフランス北部で栽培され、繊維で亜麻布を織る。これを裏地や下着地にしたことから動詞linierが生まれた。しかし118年後、チョーサーは単に「裏をつける」という意味でlynenを使っている。StoneとRothwellの辞典ではAF liner *v*があるから、チョーサーはこれからME lynenを作ったかも知れない。なお現代仏語ではdoublerを使う[57]。

33.　AF lodemenage [lodemanage] *n* 1386 Ch. *Prol.* 403

His herberwe and his moone, his *lodemenage* 403

（大意）避難港や月齢や水先案内（の心得では比類がなかった。）

これはShipmanのことである。lodemenageはlode-の部分はOE lād（道）に由来するME語であるが、menageの部分はフランス語と考えるeditorsがいるようである[58]。しかしフランス語のmenageが「案内」の意味をもったことはない。従って*S. O. D.*や*O. E. D.*やStoneとRothwell編の辞典が言うようにAF lodman（水先案内人）に仏語系の語尾-ageを加えてME lodemanageを作ったと考えるのが適当である。

34.　L. mercenarie [mercenary] *n* 1386 Ch. *Prol.* 514

He was a shepherde, and noght a *mercenarie* ; 514

（大意）彼は牧羊者で決して金だけ欲しい手伝いではない。

これはPoure persoun̄のことである。DauzatによるとOF mercenaireはXIII^{e} s. にラテン語mercenariusから作られた。一方英語のmercenarieはOFの形をLに戻している。従って直接のOFからの借用ではない。また「金目的で傭われる人」の意は1250年ころ初出していると*lexis*は言う。ほぼ同じ意味で136年後にチョーサーが初めて英語の中で使ったことになる。

35.　millere [miller] *n* 1386 Ch. *Prol.* 545

The *Millere* was a stout carl for the nones, 545

（大意）粉屋はここには不似合なくらいに頑丈な男だった。

millere（粉屋）がチョーサー初出というのはおもしろいことである。この語の中核要素mill-は「製粉所」を表わす二つの中世英語形の一つである。一つはラテン語molinaからOE mylnを経てME milneとなった流れであり、「粉屋」はmilnereとなる。他方OE myllを経てME milleとなった流れでは「粉屋」はmillereである。このmillereの出現について*O. E. D.*はDu. かLG. からの借用の可能性を示唆している。チョーサーの直接創出

ならもっとおもしろくなる。なおOF mounier, フランス語meunierはME milnereに類縁の語形である。

36. OF mormal [mormal] *n* 1386 Ch. *Prol.* 386
That on his shyne a *mormal* hadde he. 386
（大意）脛には壊疽があった。

これはCookのことである。*O. E. D.*によるとmormalで、ラテン語mortuum malumに溯る。Skeatによると逆順のラテン語malum mortuumを含むフランス語文がCambridge University Libraryにある[59]。チョーサーの借用はOFからであったとしてもtの脱落はどう説明するか。*O. E. D.*によるとチョーサー以後の時代にmortmalが出ているので、popular formかも知れない。あるいはsilent tを敢えて外したのかも知れない。

37. AF motteleye [motley] *n* 1386 Ch. *Prol.* 271
In *motteleye,* and hye on horse he sat ; 271
（大意）玉模様の服を着て背筋を伸ばして馬に跨る。

これはMarchantのことである。motteleyeはOF mattele "spotted"の借用であるとする説明もあるが[60]、*O. E. D.*はAF motelé "spotted"の借用と考えている。*O. E. D.*の説明の方が楽である。

38. L. offertorie [offertory] *n* 1386 Ch. *Prol.* 710
But alderbest he song an *offertorie* ; 710
（大意）しかし中でもうまいのが奉献誦の唱詠である。

これはPardonerのことである。*lexis*によるとOF offertoireのもとは通俗ラテン語offertoriumで、1350年ころに仏語化された。パンとワインを祭壇に奉献する（Eucharistの儀式の）間その旨を神に伝えて歌う歌のことである。従って仏語化と同時的に英語化されたことになる。しかし語形的にはラテン語の語形を尊重した形になっている。英語としての発音のしやすさから敢えてそのようにしたと推測される。

39. AF Parvys [Parvis] *n* 1386 Ch. *Prol.* 310
That often hadde been at the *Parvys* 310
（大意）（セントポール寺院）の入口前の柱廊にしばしば姿を見せた。

これはSergeant of the laweのことである。*lexis*によると（parvysのもとである）フランス語parewisの初出は1150年ころである。Marie de Franceの使用であるからAFということになる。XIIe s. 中にparvisという形が現われている。教会の柱廊ではかつて教会裁判も行われた[61]。また英国では児童の教場、学生の討論会場ともなり、ことにロンドンのSt. Paul'sでは裁判官の溜り場となった[62]。チョーサーの初使用は二世紀後ということになる。

40. L pilwe (-beer) [pillow(-bere)] *n* 1386 Ch. *Prol.* 694
For in his male he hadde a pilwe-beer, 694
（大意）袋の中には枕かけを持っていた。

これはPardonerのことである。*lexis*によるとpilweの一番もとのラテン語pulvinus（枕）はフランス語ではpulvinar（聖像布団）だけに残り、「枕」は1180年にはもうoreillerに変っていた。一方ラテン語はOEに借用されてpyle, pyluという形に短縮された[63]。MEでもこの形は基本的に変らずpüleである[64]。そして当時のオランダ語M. Du.がpulweを持っていたとすると、フランス語pulvinar [pylvinar] を参考としつつ、MEとM. Du.の二つから二音節の代替語として造語したと考えられないだろうか。

41. OF pomely [pomely] *a* 1386 Ch. *Pol.* 616
That was al *pomely* grey, highte Scot ; 616
（大意）完全な連銭葦毛で、スコット馬と言った。

これはThe Reveの馬のことである。pomelyはOF pommele（林檎型の）に由来し、初出は1160年である[65]。馬の毛の丸い斑点の連らなった模様を表わしている。チョーサーの初使用は226年の年差をもつ。

MEにはゲルマン系のdappel-grey, appel-greyがある。このうちappel-greyはpomely greyと語義的に完全に一致する。しかしappelとpomelyには二音節と三音節の差があり、チョーサーはこれを使い分けたものとみられる。スコット馬はNorfolk産の国産馬であるから殊更にフランス系形容詞を使う理由はない。チョーサーには同じ1386年にゲルマン系のdappul greyを使った例がある。*Sir Thopas* 173 His steede was al dappul grey, である。

42. F poudre-marchant [poudre-marchant] *n*

1386 Ch. *Prol.* 381

And *poudre-marchant* tart and galyngale. 381

（大意）それによく売れている風味料のぴりっと味のきいたものや香辛料やら（を振り掛けて）。

これはCookのことである。marchantはフランス語の形容詞marchand（現代もこの形で使用）から来ており、poudreを修飾する。語順はフランス語として正語順である。*O. E. D.*によればpowder marchantという形もある。

43.　OF poynaunt [poignant] *a* 1386 Ch. *Prol.* 352

Poynaunt and sharpe, and redy al his geere. 352

（大意）（ソースが）ピリッと（しなかったり、）食器類がすべて用意されて（いなかったならば）。

これはFrankeleynのことである。Dauzatによれば、poignantの初出は1119年である[66]。従ってチョーサーの初使用は267年後ということになる。poynaunt and sharpeという同義の連語からわかるように本来の英語はsharpeでこと足りていたとすれば、外来語の使用は新しい料理法の導入を示唆するかも知れない。ここで問題となっているsauceはsalseの形でフランス語初出が1190年[67]で、poignantの初出より71年遅く、saulse, sauceという後代の形の初出はfin XIVe s. である[68]。*O. E. D.*によれば英国でsauceがこの語形で初出したのは1350年であるから、英仏同時にこの語（形）の使用が始まったことになる。なおフランス語は料理について今はpiquantを使う。初出が1546年なので[69]、それ以前は別の形容詞を使っていたことになる。

44.　AF prikasour [pricasour] *n* 1386 Ch. *Prol.* 189

Therfore he was a *prikasour* aright ; 189

（大意）だから本当によく馬で駆け廻っている。

これはMonkのことである。*O. E. D.*によるとprikasourは動詞prickをベースとする名詞である。起源は、AFであろうとしているが、StoneとRothwell編の辞典はこの項未出版で確認はできない。a quick rider, (or perh.) a huntmanの意で、この人は僧の身でありながら聖なる労働には従わず、馬を駆って兎狩りに熱中している。

45.　Pruce [Prussia] *n* 1386 Ch. *Prol.* 53

Aboven alle nacïons in *Pruce* 53

（大意）プロシアでは諸国（の騎士）にぬきんでて（上座についた。）

これはKnyghtのことである。プロシアは現代フランス語でもPrusseであるが、ラテン語ではPrussiaであり、チョーサーの同時代に公文書ではPruciaがみられるが[70]、チョーサーはフランス語形Pruceを用いた。

46.　OF pultrye [poultry] *n* 1386 Ch. *Prol.* 598

His swyn, his hors, his stoor, and his *pultrye* 598

（大意）豚、馬、家畜それに家禽（はこの管理人がすべて預った。）

これはThe Reveのことである。*C. O. D.*によるとpultryeはOFにおいてpoul(l)etrieとして初出している。そのもとはpoul(l)etier "poulter"（家禽商人）で、従ってpol(l)terieは「家禽商売」を意味した。これを「家禽」として初めて使ったのがチョーサーである。一方この語の基本部分のpoulet-は現代フランス語でもpoulet（若どり）として存在するが、「家禽」の意味は別系統のvolaille（「鳥類」1200年：「家禽」1552年）にとって代られている[71]。

47.　AF reportour [reporter] *n* 1386 Ch. *Prol.* 814

And of oure tales juge and *reportour* 814

（大意）一同の話の審査を務め結果を発表します。

これはoure Hoostのことである。AF reportourはreporter (*v*)する人の意であるが、OF形ならばreporteurである。なおスタンダールが1829年に英語のreporter〔rəpɔrtɛr〕（新聞記者）を借用して以来そのままになっていたところ1973年に政府がreporteurに改めたという経緯がある[72]。

48.　roialliche [royally] *ad* 1386 Ch. *Prol.* 378

And have a mantel *roialliche* y-bore. 378

（大意）（金持職人衆の奥さん達は結構なことに）女王様のようにマントの裾を持たせて（歩く。）

roialliche の中核要素roial-はラテン語regalisから880年に仏語化され、regielという形で現われた[73]。1155年にはrealという語形もみられる[74]。副詞形はreialmentという形で先ずXII^{e} s. に作られ、次いで

roialmentとなり、最後にroyalementという形になったたのは1480年である[75]。これからみてroialliche という英語の副詞形はフランス語の「王」の部分の綴りがroi-であったころに英語化されたと考えられる。なお例えば *The Knight's Tale*の1687行、1793行ではroiallyで、副詞語尾は-licheからより近代的な-lyに変更されている。

49. OF sawcefleem [saucefleem] *a* 1386 Ch. *Prol.* 625

For *sawcefleem he was* , with eyen narwe 625

（大意）塩粘液質で、顔は吹出物に蔽われ、瞼もはれて。

これはSomonourのことである。*O. E. D.*によるとsawcefleemはOF sauceflemeに由来し、そのもとは中世ラテン語salsum flegmaである。一方医学史によると、このようなラテン語は十三世紀のヨーロッパに大きなセンセーションを巻き起こしたアラビア語医学文献のラテン語訳の中に現われた[76]。従ってここでの興味はこのようなラテン語がどのような経路で、どれほど速く地方語化されて行ったかということになる。フランスではflegmaは1265年にはfleugmeという形でフランス語化され[77]、gのないflaimmeも同じXIII^{e} s. 中に出現している[78]。英語では1387年にフランス借用語としてfleemが初出していて[79]、一世紀の遅れがある。もっともラテン語文献の出回り方は別途の問題として調査しなければならないが。

50. AF scoleyn [scoleye] *v* 1386 Ch. *Prol.* 302

OF hem that yaf hym wher-with to *scoleye* 302

（大意）特に学資を恵んでくれた方々の（霊安かれと祈る。）

これはA Clerk（of Oxenford）のことである。これは古語で「学生」のことを言う。*O. E. D.*はscoleynについてAF escoleierを推定している。もちろんOF escole（学校）が中核要素である。これから作られる動詞は今écolerである[80]。*O. E. D.*によると、scoling〔=Mod. E schooling〕という名詞が1449年ころ初めて使われている。「学校」という意味のscoleは1000年ころすでに英語に現われている。いずれにしても十二、三世紀には教育の大躍進が遂げられ大学まで出現して[81]、学校へ行くことが教育となって行った事情をよく表わす動詞である。

51. ML semycope [semicope] *n* 1386 Ch. *Prol.* 262

Of double worstede was his *semycope* 262

（大意）二重織の毛糸のハーフオーバーを着ていた。

これはFrereのことである。semi-を除いた中核部分cope（オーバー）についてO. E. D.はML capaから入ってOE capeを経てME copeとなり、聖職者用のマントも指したとしている。一方DauzatによるとML cappaから入ってOF chape（頭布、拡張してマントも指す）となり、後にもとの形に戻してcapeとなり、特にmanteau eccl. 等を指した。従ってME cope, OF capeも実質的な差はない。semy-（半）は14世紀から使われ出したラテン系接頭語で、*O. E. D.*によればチョーサーはその使用上の先駆者の一人である。

52. OF sessioun [session] *n* 1386 Ch. *Prol.* 355

At *sessiouns* ther was he lord and sire ; 355

（大意）治安判事の長も務めた。

これはFrankeleynのことである。チョーサー自身も治安判事だったことがある[82]。sessiounsは*O. E. D.*ではsessions of the peace（in ordinary language simply sessions）の項に説明がある。Dauzatによるとフランス語でsessionの現われたのは1130年で、その後XVI^{e} s. 中までfait ou manière d'être assis（着座）だけを意味した。「治安判事の定期審理」を意味するこのsession (s)はやがて「会議」一般も意味するが、これは英語1444年[83]、フランス語1600年ころ[84]で、英語が156年もリードする。純フランス語séanceも初出は1594年である[85]。このような英国フランス語の先行現象はノルマン人の政治的天才を表わすかも知れない。sessiounは綴り上、AF語である。

53. L significavit [significavit] *n* 1386 Ch. *Prol.* 662

And also war him of a *Significavit.* 662

（大意）また人は入牢令状にも気をつけるよう。

これはSomonourの言葉である。Significavitのもとは同形の三人称単数完了形のラテン語動詞で、The bishop has signified to the king …の意のラテン語文のhas signifiedに当るものを名詞化したものである。ところで数多く出されたという[86]この令状のことをチョーサーが初めて英語化して使ったというのは面白い。

54.　OF stuwe [stew] *n* 1386 Ch. *Prol.* 350
many a breem and many a luce in *stuwe.* 350
（大意）沢山の食用鯉や河鱒を池に飼っていた。

これはFrankeleynのことである。*S. O. D.*によるとME stuweのもとはOF estuiである。Dauzatによればこのestuiの初出は1190年、prison（牢獄）次いでboîte oũ l'on enferme（箱）を意味した。英語では196年後にチョーサーが初めて使ったことになる。本来の英語ではfishpoolが950年ころに初使用であるが、これはラテン語piscinaの訳語である[87]。fishpondはチョーサーより後れて1440年初出である。[88] いずれにしても「池」と「食用鯉」と「河鱒」の三つがフランス借用語というのは面白い。英語では今でもstewを「いけす」の意味で使うが、フランス語は今ではvivierである。ラテン語piscinaのフランス語piscineは主として「水泳場」の意味で使う。

55.　OF tartre [tartar] *n* 1386 Ch. *Prol.* 630
Boras, ceruce, ne oille of *tartre* noon, 630
（大意）硼砂でも白鉛でも酒石でも（治らない。）

これはSomonourのことである。*lexis*によるとML tartarumに由来する。フランス語tartraireは1380年ころの初出である。従って6年後にはもうチョーサーが、tartreという形で英語で初使用していることになる。面白いことに現代フランス語の綴りはチョーサーと同じtartreである。現代英語はラテン語に戻ってtartarである。

56.　AF tapycer [tapisser] *n* 1386 Ch. *Prol.* 362
A Webbe, a Dyere, and a Tapycer, 362
（大意）織屋、染屋それにつづれ織屋（がいた。）

*S. O. D.*によるとOF tapicier, AF tapicerである。従って明らかにAF由来である。*lexis*によるとtapicierのvariantとしてのtapissierの初出は1226年である。従って-ss-形のOFから160年後にチョーサーがAF形を英語として使ったことになる。

57.　F toft [tuft] *n* 1386 Ch. *Prol.* 555
A werte,　and theron stood a *toft* of herys, 555
（大意）いぼがあり、上に一房毛が生えている。

これはMillereのことである。Greimasによると、tofteは1304年の*Year Books*にtaftという形で見られるという。この文書の正式名は*Year Books of the Reign of Edward the First*（ã partir de 1304）である[89]。意味はplantationである。*S. O. D.*はフランス語touffeに-tを加えた形とみる。*lexis*によるとtouffeはune touffe de cheveux, de poilsという風に使う。

58.　AF walet [wallet] *n* 1386 Ch. *Prol.* 681
For it was trussed up in his walet. 681
（大意）（頭布は）頭陀袋の中にしまっていた。

これはPardonerのことである。*Ox. Eng. Etym. Dic.*はwaletをドイツ語起源のAN（＝AF）waletに由来するものと推定する。フランス語に訳すとvaliseとなるが、valiseは1564年初出[90]で、イタリー借用語である。

59.　AF　Watte [Wat] *n* 1386 Ch. *Prol.* 643
Kan clepen *Watte* as wel as kan the pope. 643
（大意）（カケスが）ワットと叫ぶうまさは法王様に劣らない。

これはSomonourについての陳述である。*Webster's New World Dictionary*（2nd ed.）によると、Watのもとの形WalterはO. Norm. F. Waltierに由来する。本来はフランク語であるが、仏語化されてGautierとなる。中世英国の英語で書かれた公文書をみるとWalter, Wauter, Waterが多い[91]。WaltはWalterから、WatはWaterから作られた短縮形であると考えることができきる。（完）

文　献

51）現代スペイン語はjubonでジュバン；チョッキを意味する。

52）*lexis*による。

53）J. F. Niermeyer編 *Mediae Latinitatis Lexicon Minus*, Leiden, E. J. Brill, 1976による。

54）A. W. Pollard (ed.)：*Chaucer's Canterbury Tales The Prologue*, Macmillan, 1976.（Notes, P. 64）による。

55）*The Encyclopaedia Americana*のcarpの項（トロント大学E. J. Crossman執筆）による。

56）M. Louis Cazamian, Professeur ã la Sorbonneの現代仏訳による。

57）56）と同じ。
58）54）のPollardはlode-menageとしている。
59）MS. Oo. i. 20, last leaf : 'Por la maladie que est apele malum mortuum.'
60）54）のPollardのeditionによる。
61）*lexis*による。
62）54）のPollardのNotesによる。
63）*O. E. D.* による。
64）*Oxford Middle English Dictionary,* 1978による。
65）*lexis*による。
66）チョーサーのpoynauntという綴りはAF系であるから、これと関係はない。
67）Dauzatによる。
68）Dauzatによる。
69）*lexis*による。
70）*Calendar of Patent Rolls Richard II* 1391（マンチェスター大学図書館所蔵）のJan. 26 Westminsterに'Prucia, the Hanse, Guelderland and Holand' の句があり、この中にPruciaがみられる。
71）*lexis*による。
72）*lexis*による。
73）*le Robert,* 1980による。
74）同上辞典による。
75）同上辞典による。
76）Singer and Underwood, *A short History of Medicine,* Oxfohd, 1962,（マンチェスター大学図書館所蔵）pp. 77-8 による。
77）Dauzatによる。
78）*le Robert*による。
79）*O. E. D.* による。
80）*Grand Dictionnaire Universel,* Larousse, 1983による。
81）T. L. Jarman : *Landmarks in the History of Education,* 2nd ed., John Murray, 1963（マンチェスター大学図書館所蔵）による。
82）*Richard II Calendar of Patent Rolls*（マンチェスター大学図書館所蔵）1385 Oct. 12 Westm. : 'Association of G. Chaucer in the comission of the peace and of oyer and terminer in the county of Kent, …'による。
83）*O. E. D.* による。
84）*lexis*による。
85）*lexis*による。
86）F. N. Robinson (ed.) : *The Complete Works of Geoffrey Chaucer,* 2nd ed., 1983 Explanatory Notes による。
87）*O. E. D.*による。
88）同上辞典による。
89）　マンチェスター大学所蔵。StoneとRothwell編の*Anglo-Norman Dictionary*の文献リストに載るAFの言語資料である。筆者は1984年7～8月文部省在外研究員として滞在中発見するに至らなかった。
90）*lexis*による。
91）*Calendar of Patent Rolls Edward III 1370-1374* の巻だけでも姓と名の両方にまたがってほかにもいろいろな異形がみられる。即ち'Watre', 'Watere', 'Watter','Watte'である。特に最後のWatteについては 1371 april 7 'Joan, wife of Robert Watte' と言う形で見られる。また仏文では *Rotuli Parliamentorum ; ut et Petitiones, et Placita in Parliamento Tempore Edwardi R. III* II 1326-1376, p. 42 に'Wauter de Stratton'が見られる。同じく *Recueil de Lettre Anglo-Français 1265-1399* Ed. par F. J. Tanquerey, Paris, Champion, にも'sire Wautier de Langetone' が見られる。またラテン語公文書の場合は、*Placitorum abbreviatio Ric I, Johann, Henri III, Edw I, Edw II*（1811年出版）によると、'Waltus' で、Warr' の項 p. 5に'Waltus de Danmartin' が見られる。

（追加）1. AF achatourの項でチョーサーが税関長を務めたと述べたが、使った一次資料は *Calendar of Patent Rolls Edward III 1374-77*（Manchester大学図書館所蔵）である。1377 May 10 Westminsterの日付けでWhereas Geoffrey Chaucer, *controller* of the custom and subsidies of wools, hides and woolfells and other customable things in the port of London,…という記載がある。

Abstract

A Study of Latin and French loan words which Chaucer first used in the General Prologue to *The Canterbury Tales*

Katsuzo HOYA

This is the second installment of the study of the Latin and French loan words which Chaucer first used in the General Prologue to *The Canterbury Tales*. Out of the 59 words, 1.～26. have already been treated in the initial number of this *Bulletin*. The remaining 27.～59. are treated here. The date of Chaucer's first borrowing is compared with that of the first recorded appearance in the French language. The rapidity and the cultural background of borrowing are elucidated. Central French and Anglo-French are also distinguished and the nuance of borrowing is explained. (Concluded)

Department of Foreign Languages (English)